

願掛けのお大師

昔、町守屋に笹原川を境にして、二人の長者がおった。どういうわけか、お互いに仲が悪く村人たちも川をはさんでいがみ合っていたそう。川向こうの長者に伊太郎、川のこちらの長者には菊という娘がいた。お互いに川に向けて呼びあって恋を燃していた。親同志が仲が悪いので二人の恋は結ばられる筈はない。

ついに恋の病に、二人は日に日に瘦せおとろえていった。子を想おもわない親はない、両方の長者は子を見るにつけ悲しんだ。そのころ川向こうに霧ヶ寺というお寺があって、高野山から来たともいわれた従縁和尚が居った。徳の高い人であったので、娘の長者は寺に相談にいった。

実はうちの娘が夜な夜な眠れず、ろくなご飯もたべない。毎日ぼうつとして来て、果て困りました。どうしたらよかんべない、と話した。御坊は病気にはちがいないが、なおる病気だと。それには二つのことをやらないとなおらないよとといった。

ひとつは、二人の長者で川に橋を掛けること。もうひとつは、

つは、お大師さまの碑を立てること。

長者は早速村人に命じて橋を掛けた。従縁和尚は石にお大師さまを刻み、橋のたもとに立て、三日三晩密法真言を唱えた。どうしたことか長者も村人たちもいつのまにか心が和らぎ、村中明るくなった。そして伊太郎と菊は間もなく祝言をあげ、橋の渡りそめをして川向こうに嫁にいった。その後二人は幸せな暮らしをして、村も益々栄えていった。今もだれ言うことなく、願掛けお大師さまといわれ、願を掛ければ願ねがいごとが適かなうといわれている。願掛けお大師は、西蔵寺の境内けいだいにある。